

日本語空間表現「左」と「右」における曖昧さ ——パイロットスタディより——

松 尾 夏 海

1. はじめに

他者との向かい合いで会話をするとき、「左」や「右」の問題で戸惑うことがあるだろう。例えば、授業中、学生に黒板の右側を見てほしい場合、伝え方が適切でなかったと感ずることがある。「右側を見てください。」と言っておきながら、学生から見たら左側だったことによる混乱などがその例である。一見すると、左右の言い間違いのように思えるかもしれないが、実際には、より複雑な問題が潜んでいる。つまり、誰を視点の中心に語っているのか考慮する必要があるのだ。話し手である「私（教員）から見て」なのか、もしくは聞き手である「学生から見て」なのかという軸を明確にしなければ、戸惑いが生じることが予想される。

次の図1に対して、「Bさんの左は誰ですか？」と問われた場合に何と答えるであろうか。

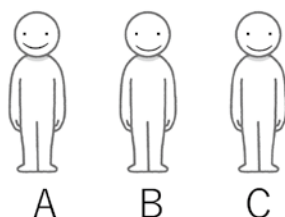


図1：Bさんの左を問う3人の並び

おそらく、Aさんと答える人もいれば、Cさんと答える人もいるだろう。この問いには、上述した例と同様の問題があると言えよう。というのも、「B

さん側から見て」なのか、「これを向かい合って見ている人（聞き手）から見て」なのか視点の中心が決められておらず、視点の複数性が考えられるからである。では、英語でも同様の現象が起きるのかというと、必ずしもそうではないことが Grundy (2008) において論じられている。次の図2に対する (1)～(3) のそれぞれの主語は、⇒ によって示されている通りであるという。



図2：写真の中にいる3人の並び (Grundy 2008 : 30)

- (1) _____ is to the left of Mark. ⇒ Sue
 (2) _____ is on the left of Mark. ⇒ Sue or Dave
 (3) _____ is on Mark's left. ⇒ Dave

(下線部および ⇒ は筆者によるものである。)

どの表現も「_____はMarkの左にいます。」と訳せる (1)～(3) であるが、日本語とは異なり、(2) 以外は誰を指しているのか、明確になっていることが見て取れる。

したがって、本稿では日本語と英語の空間表現それぞれを観察・比較しながら、「_____の左 (/右) に○○があります (います)。」という表現において、日本語の空間表現の方が曖昧さを生じさせるという前提のもと議論を進める。本研究の目的は次の2点である。① 先行研究をもとに空間表現の曖昧さ要因を整理する。② パイロットスタディをもとに研究方法の確立を試みる。

2. 空間表現の切り分け方

2.1. 参照枠の3パターン

空間表現は言語により異なり、必ずしも言語間で同じ表現をするわけではない。Levinson(1996)によれば、空間内に存在する物体は「参照枠 (frame of reference)」に基づいて表現され、参照枠は大きく「絶対的参照枠 (absolute frame of reference)」、「相対的参照枠 (relative frame of reference)」、「内在的参照枠 (intrinsic frame of reference)」の3パターンに分けられる。3つの参照枠についてLevinson(1996)をもとにまとめると次のようになる。まず、絶対的参照枠は方角（東西南北）のように絶対動かない軸を参照枠とし、例えば「ボールは木の東にある。」といった空間表現をする。方角に限らず、ツェルタル語を母語とするテネハパ族のように、その土地の条件が空間表現に反映され、「上り側 (uphill)」や「下り側 (downhill)」という語を使い、日本語における「左」や「右」にあたる語彙がない言語も存在する (Levinson 1996, 井上1998)。次に、相対的参照枠は「視点 (viewpoint)」、「図 (figure / referent)」、「地 (ground / relatum)」の3者関係によって軸が決まり (Levinson 1996)、視点は話し手に限らず発話参加者を含んでいる。最後に内在的参照枠は、「図」と「地」の2者関係によって軸が決まり、対象となる物自体に備わった性質を軸に反映させ、例えば、顔がある方を正面とし、左腕がある方を左と見なすといったように、発話参加者の視点は一切関係ない。

このように参照枠に目を向けると、ある言語においては重要な情報が、ある言語では重要視しない可能性があるというのは非常に興味深い。1つ目の絶対的参照枠に関して言えば、多くの日本人にとって北がどっちで南がどっちなのか判断することすら難しいであろう。日本語空間表現の曖昧さは残り2つにあるのだ。つまり、日本語の「_____の左(右)に〇〇があります。」という表現には、視点によって指し示すものが変わる相対的参照枠を取るのか、基準となる「地」の立場から考える内在的参照枠を取るのかという曖昧さがある。

2.2. 視点・指示基準点・指示物

2.1. で「視点」、「図」、「地」という位置表現について言及したが、空間における事物にはそれぞれ位置表現があり、ここで確認および統一をはかることにする。Levinson(1996) でfigure / referent, ground / relatumとしている位置表現をTalmy(2000) では、「図 (figure)」と「地 (ground)」の2つの概念によって分析することを試みており、それぞれを次のように述べている。「図」とは、移動可能な事物であり、位置や動きが説明される対象である。一方、「地」とは、動かない事物のことであり「図」の位置を特定するための基準となる対象である。言い換えると、「地」を基準に「図」の位置が表現される。本稿では、さらに「視点」に重きを置き、呼び方の統一をはかるため次の呼び方とする。基準となる「地」を「指示基準点」に、移動可能な事物である「図」をLevinson(1996) でreferentとしていることから「指示物」と呼ぶことにする¹。確認を行うために、(1) と (3) の例文に主語を加え (4) と (5) として説明する。

- (4) Sue is to the left of Mark.

指示物 指示基準点 ← (視点)

- (5) Dave is on Mark's left.

指示物 指示基準点

(4) は文中には現れていない、「視点」である発話参加者、「指示物」であるSue、「指示基準点」であるMark からなる3者関係が成立する。具体的に言えば、Sue (指示物) の位置を示すためにMark (指示基準点) が基準になっていると解釈できる。(5) は「視点」が存在せずDaveが「指示物」、Mark'sが「指示基準点」からなる2者関係が成立する。こちらも同様に、Dave (指示物) の位置を示すためにMark's (指示基準点) が基準になっていると解釈できる。

3. 曖昧さの要因

3.1. ダイクシス表現と非ダイクシス表現

第2節において、発話参加者の視点によって軸が決まる空間表現として相対的参照枠を提示したように、本稿で取り上げている「左」や「右」といった言葉は一般にダイクシスの側面²を持っている (Fillmore 1997)。この表現は、発話状況に依存し、発話参加者がどのように軸を決めるかが重要となり、発話参加者の視点が変われば指し示す先も変わる。

しかし、「左」や「右」という空間表現は、必ずしもダイクシス表現であるとは限らない (Levelt 1996, Fillmore 1997)。つまり、指示物の左右が話し手の視点に影響しない場合があり、Fillmore (1997) において、人間が物体に対してどのように自身を位置付けるかによって左右が決まると論じられている³。例えば、次の (6) と (7) はそれぞれダイクシス表現と非ダイクシス表現の left である。

(6) What's that shiny object over there, just to the left of the cypress tree?

(7) My sister stood at the general's left side.

(Fillmore 1997 : 28)

Fillmore (1997 : 28) によれば、(6) の日本語訳「あそこにある光る物体は何ですか？ 糸杉のすぐ左にある」を解釈するには、発話参加者の空間的位置関係が重要になってくる相対的参照枠を取っているという。また、(7) は発話参加者の視点ではなく、指示基準点である general 側の視点を選ばれ、顔がある方を正面として左右が決まる内在的参照枠を取っているという。ここで生じる疑問は、「日本語でも同様であろうか？」ということであろう。言い換えると、「私の姉は将軍の左側に立っている」と発話された際に、第2節において指摘したように、相対的参照枠を取るのか、内在的参照枠を取るのか、日本語では絞り込めないのではないかという疑問が生じる。日本語においては (7) のような場合、参照枠を絞り込むことはできず、相

対的参照枠を取る人もいれば、内在的参照枠を取る人もいるだろう。この部分については、次の第4節で英文の構造を見ながら考察することにした。

また、参照物の特徴によってもダイクシス表現であるか否かは影響を受ける。より具体性を持たせるために Levelt(1996:87) が図示している図3aと図3bを提示する。図3aは、机の「左 (left)」、「右 (right)」、「前 (front)」を表したものであり、次の図3bは、椅子の「右 (right)」、「左 (left)」、「前 (front)」を表したものである。これについて、Levelt(1996:87) は物体における左右の位置はそれぞれの物体の「機能的な (functional)」特徴によって決まると言及している。

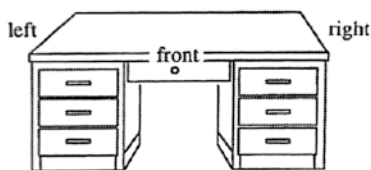


図3a：机の左右

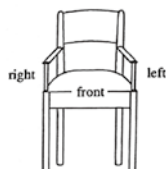


図3b：椅子の左右

(Levelt 1996:87)

つまり、図3aの机は人間が使用する際に机に向かって使用するため、机と向かい合って左に左側の引き出しがあり、右に右側の引き出しがある。一方で、図3bの椅子は人間にとって、座るものであり座ったときに人間の右ひじが図3bのright側に置かれ、左ひじがleft側に置かれるため正面からではなく、座った状態を想定して左右が決まると言える。本稿では、前者を人間が向かい合って使用することで左右が決まることから「対立型」とし、後者を人間が同じ向きで使用することから「一致型」と呼ぶことにする。これらのように、発話参加者の視点に関係なくその参照物が持つ機能によって、左右が決まる場合を非ダイクシス表現と言う。

3.2. 視点の複数性

ここまで述べてきたように、「左」や「右」という空間表現は、複数の解釈が得られ、少なくとも、言葉・身体・発話参加者の視点が影響を与えていることを論じてきた。また、机や椅子は、人間がどのように使用するかで左右が決められていることをすでに確認したが、家のような建物にも複雑な問題があると考えられる。どちらも「前」を特定できることから、一見、左右の区別も容易であるように思えるかもしれない。しかし、家は内側から見る場合と外側から見る場合で変化が生じる。つまり、「前 (front)」を持つが、外側からの視点と内側からの視点では左右が入れ替わってしまうわけである (Levelt 1996: 88)。左右の位置関係は固定されたものではなく、視点をどこに置くかによって変化すると言える。

次に、事物が増えることで、事態はより複雑化することを述べる。例えば、図4のように第3の事物としてノートパソコンが加われば、ノートパソコンを指示基準点として、Aに「ノートパソコンの左にあるものは何ですか。」と問われた場合、A(問いかける人)から見てなのか、B(あなた)から見てなのか、さらにはノートパソコンの機能的特徴から見てなのか、というさらなる視点の複数性による混乱を招くことになるだろう。つまりAを視点の中心にすれば、「左」はラグビーボールになるだろうし、Bを視点の中心にすれば、サッカーボールになるだろうし、ノートパソコンを視点の中心にすれば、バスケットボールになる。また図4の靴の図は、Aを視点の中心にすれば、「左」はラグビーボールになるだろうし、Bを視点の中心にすれば、サッカーボールになるだろうし、靴を視点の中心にすれば、「左」はバレーボールになるという視点の複数性が考えられる。3.1.で述べたように、ノートパソコンは人間が使用する際に向かい合って使用する対立型であるが、靴は一致型である点に注意しておきたい。

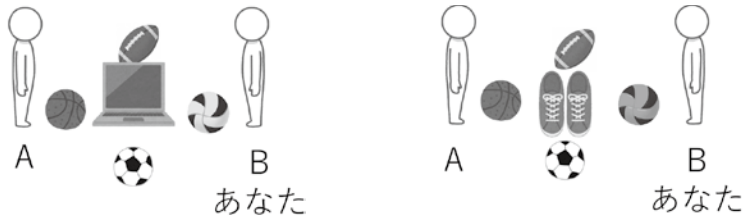


図4：左右を論じるための視点が複数ある例（パソコンと靴）

3.3. 有生性（animacy）

一般に有生（animate）とは人間のように意志を持つものを言い、反対に建物や家具などは意志を持たず無生と言う。この3.3.では有生性が空間表現に与える影響について日本語における可能性を述べたいと考える。有生性が空間表現において重要な役割を果たしていることはスペイン語と英語との比較がなされている（Olloqui-Redondo, Tenbrink & Foltz 2019）。Olloqui-Redondo, Tenbrink & Foltz(2019)によれば、スペイン語話者は内在的参照枠を取る傾向にあり、英語と比較すると有生性（animacy）に敏感な言語であると述べられている。また、主語が有生であれば、内在的参照枠が選好される傾向にあることを報告している。指示物として使用された事物は、有生物（人間や動物など）、擬人的事物（anthropomorphic）（ロボットや像など）、前後左右のないもの（木や花瓶など）、左右のあるもの（テレビや車など）。この先行研究から日本語においても、有生物の方がより内在的参照枠を選好する可能性は大いに考えられる。

4. 英語の統語構造から見る曖昧さ

4.1. 「～の」にあたる前置詞 of と所有格 [’s]

第3節までは、空間的な表現方法を主に概観してきたが、この節では英語の文構造にも注目し、日本語の方がより空間表現に曖昧さを持たせることを論考していく。左側か右側か問う「_____の左（右）に○○がありま

す(います)。」という空間表現において、「～の」は必須である。そこで、「～の」に対応する英語の前置詞 of と所有格 [’s] について簡単に触れ、空間表現にどのように関与しているのか確認を行っていこう。

比較するために図2を図5として、(1)～(3)を(8)～(10)として再掲する。



図5：写真の中にいる3人の並び (Grundy 2008：30)

- | | | | |
|------|-------------------------------|---|-------------|
| (8) | _____ is to the left of Mark. | ⇒ | Sue |
| (9) | _____ is on the left of Mark. | ⇒ | Sue or Dave |
| (10) | _____ is on Mark's left. | ⇒ | Dave |

全て「_____ はMarkの左にいます。」と訳せる(8)～(10)はGrundy (2008：274)によると、ofを用いた(8)は、話し手の視点が回答に反映し、発話参加者である話し手から見て左側を選ぶ相対的参照枠を取っている。次に、(9)は(8)と同様の相対的参照枠とMark側から見ての左側といった内在的参照枠の2通りの解釈ができるという。最後に、(10)は所有格(Mark's)を用いた例文であり、Markから見た左側といった内在的参照枠を取る解釈になるという。興味深い点は、日本語では参照枠を絞り込めないことで生じる曖昧さが、英語では(8)や(10)のように絞り込める点である。

従来、石黒(2011)が記すように、所有格は主に人間や生物に用いられ、そのほかの名詞には of を用いられると見なされてきた⁴。しかし、この主張は否定されつつある(綿貫 & ピーターセン 2006：353–354, 大西 & マクベイ 2011：205–206)。綿貫 & ピーターセン(2006：353–354)では、『生物には <'s> を用い、無生物には <of+名詞> を用いるのが原則で、無生

物に〈's〉が用いられる場合もあるが、これは慣用的な例外である』と教える伝統が長く続いていたが、最近ではこうした教え方はあまり見られなくなっている。」と述べられている。この指摘の妥当性を裏付ける根拠として、綿貫 & ピーターセン (2006) は次の (11)a ~ c を提示している。人間でも生物でもないbuildingに所有格 ['s] を用いている例であり、(11)を見る限り、人間や生物などの有生性は関係なさそうである。

- (11) a. the building's lobby (そのビルのロビー)
 b. the building's owner (そのビルのオーナー)
 c. the building's history (そのビルの歴史)

(綿貫 & ピーターセン 2006 : 354)

さらに、細馬 (2008) においては、chairに所有格を使用している例として、(12) を提示している。「犬は椅子の右にいます。」という文の解釈はMark's leftと同様に「椅子から見て右側」といったように指示基準点である椅子を視点の中心にした内在的参照枠を取っているという。

- (12) The dog is at the chair's right.

(細馬 2008 : 39)

要するに、綿貫 & ピーターセン (2006) の主張は妥当であり、人間や生物以外でも所有格 ['s] が使用されることはあると言えるだろう。また、この主張に追加できる興味深い情報として、Fillmore (1998) では次の (13)、(14) を例としてあげ、所有格 ['s] の使用に制限がかかる場合を説明している。

- (13) Mr. Smith is to the left of palm tree.
 (14) *Mr. Smith is to the palm tree's right.

(Fillmore 1998 : 34)

例文 (13)「スミスさんはヤシの木の左にいる。」には前置詞 of が使用され英文として問題ないが、所有格 the palm tree's right を使用している (14) は非文となっている。Fillmore (1998) によると、(14) に所有格 ['s] が使えない理由として、この場合の指示基準点である the palm tree が左右を持たないためであるという。この説明により、(11) の building や (12) の chair がなぜ所有格 ['s] を使用できるのか説明できる。その理由は、building (建物) には一般的に、入り口があることから前 (front) が想定でき、自ずと左右も想定できるからであり、椅子も同様に、人間が座るものであることから、左右の判断がつく参照物と言えるからである。

まとめると、英語において前置詞 of と所有格 ['s] は、どちらも日本語では「～の」と訳せるが、使用状況は異なる。また、人間や生物であるといった有生性の有無には関係なく前後左右を特定できるものには所有格 ['s] を使用でき、その場合には、参照枠は内在的参照枠に絞り込めると言える。

4.2. 「～に」にあたる前置詞 to / on / at

4.1. においては、前置詞 of (～の) に注目した。左右の空間表現を問う上で重要なもう一つの表現は「～に (あります。/ います。)」にあたる言葉である。ここでは空間表現 “the left” の前に使用されている前置詞 to / on / at に注目し、参照枠決定への影響について迫る。次の (15) は細馬 (2008: 39) によると、話し手中心と解釈され、話し手から見て椅子の右側に犬がいることを意味する例であるという。

(15) The dog is to the right of the chair.

(細馬 2008: 39)

細馬 (2008: 39) によると、「英語では、前置詞や語順をちょっと変えることで、話者のとっている座標軸を絞り込むことができる。」と指摘されている。要するに、空間表現 the right の前にある前置詞 to が座標軸を決め

ているのである。(16)～(18)は to 以外の前置詞 on と at のそれぞれを比較するために参照枠を明示している (図5参照)。

- (16) _____ is to the left of Mark. ⇨ 相対的参照枠
 (17) _____ is on the left of Mark. ⇨ 相対的参照枠 or 内在的指示枠
 (18) _____ is at the left of Mark. ⇨ 相対的参照枠 or 内在的指示枠

(16) は前置詞の to を使用し、話し手の視点が関わっていることから、ダイクシス表現であり、参照枠としては相対的参照枠である。次に (17) は前置詞 on が使用されており、(16) 同様ダイクシス表現であり相対的参照枠、もしくは、非ダイクシス表現であり参照枠は内在的指示枠と言える。(18) については、ネイティブスピーカーへの聞き取り調査⁵の結果、(17) 同様に2パターンの解釈が可能であるという。これらの例文から、日本語とは異なり英語においては前置詞をどのように用いるかによって、参照枠を特定できると結論づけられる。

しかしここで解決されていない問題が一つある。図5において、検証されていないパターンとして、話し手側からの回答が反映される to と Mark 側からの回答が反映される所有格 (Mark's) を用いたパターンである。そこで、次の (19) の場合にどのような回答が得られるのかについて、ネイティブスピーカーに聞き取り調査をした。

- (19) _____ is to Mark's left.

その結果、この場合は Dave であるという回答を得た。to 以外の前置詞 on や at に変えたパターンとして (20)、(21) での聞き取り調査も行ったが、やはり、所有格 ['s] を用いる場合には、['s] に付随する名詞側から見ての回答が反映されることが明らかになった。

(20) _____ is on Mark's left.

(21) _____ is at Mark's left.

つまり、所有格 ['s] が使用される場合には、Mark 側から見ての「左」になり、内在的参照枠を取る。

結果として、統語構造により判断できる英語と発話参加者等の視点を考慮せざるを得ない日本語とではやはり日本語の方がより曖昧さがあると言えるだろう。少なくとも英語においては、生物や人間であるときのみに限らず、それ自体に内在性がある場合には、所有格 ['s] を使用することができ、尚且つ、参照枠としては、内在的参照枠で空間表現をすると結論づけられる。この指摘を日本語に照らし合わせると、内在性を持つ対象を指示基準点に置いた場合、日本語話者においても内在的参照枠を選択する場合が増えることが仮説として立てられる。ただし、前置詞である to / on / at とそれに対応する日本語の助詞「～に」を並行して比較するのは容易ではないと思われ、議論の錯綜を避けるために本稿では前置詞 to / on / at と「～に」の比較についてはこれ以上言及しないこととし、次の第5節では、日本語の空間表現の曖昧さを調査すべくパイロットスタディについて述べることにする。

5. 左右の空間表現に関するパイロットスタディ

5.1. 調査目的と手順

ここで実施するパイロットスタディの目的は、左右表現の曖昧さを確認し、パターンごとにどのような結果が得られるのか観察するためである。パイロットスタディの結果によって、この方法に問題点があるかを検討し、今後の調査内容を決定することを最終目的としている。手順としては以下の (22a) の質問文を指示する人（以降、指示者）が向かい合っている被験者に伝えるものと考え、写真を見た上で選択式アンケートに答えてもらい、どのような結果が得られるのか分析するものである。(22a) の下線部

には、写真の中心にあるもの、つまり指示基準点になるものが入る。今回の被験者は、実践女子大学において英語学のゼミに所属する日本語話者の15名に協力していただいた。

【質問文】

(22) a. 指示者：_____ の左に何がありますか？

b. 回答者：○○です。

5.2. 分析パターンおよび仮説

分析するにあたり、パターンは内在性有無、有生性もしくは擬人的要素の有無、どのように左右が決まるのかについての機能的特徴の三点に注目し、どのように左右が決められているのかを考える。これら3つの観点から指示基準点と周囲の参照物は図6、および図7の写真にまとめた通りである。

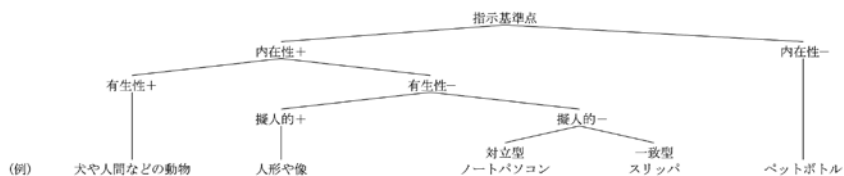


図6：指示基準点のパターン

指示基準点となるものの例は次の5つである（図7a）。① 犬などの動物である有生性のある事物、② 人形や像などの擬人的要素のある事物、③ 対立型のノートパソコン、④ 一致型のスリッパ、⑤ 機能的特徴を持たないペットボトル。そして、周囲の参照物となるものは次の4つである（図7b）。① ゴルフボール ② サッカーボール ③ バasketボール ④ 黄色いボール。



図7a：指示基準点

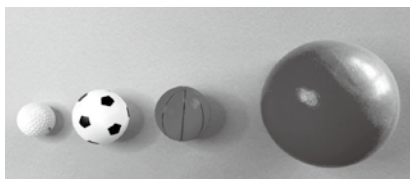


図7b：周囲の参照物

質問する際に使用する写真の例は次の図8a～eの通りである。写真に写っている白い人間が指示者であり、それに対して被験者は向かい合っており、指示者から受けた質問に答える場面を想定している。






a. 内在性+, 有生性+	b. 内在性+, 有生性-, 擬人的+	c. 内在性+, 有生性-, 擬人的- (対立型)
		
d. 内在性+, 有生性-, 擬人的- (一致型)	e. 内在性-, 有生性-	
		

図8：パイロットスタディで使用した5パターン

この調査は、今後の調査の有効性を調べるために実施することから、内在性のある場合を4パターン用意する必要があるのか、(22)で提示した質問の聞き方は適切であるのか、といった点に注意しながら、仮説として次の(23)を立てることにする。

- (23) a. 人間のように顔が備わっている場合には内在的参照枠が増える。
 b. 「対立型」と「一致型」の内在的参照枠選択者は、左として選ぶものが対照にあるものとなる。
 c. 視点の中心として指示者を選ぶ被験者は少ない。

(23a) については、犬やティンカーベルのような参照物は人間と姿・形の似ているものとして考えるため、その参照物の視点で考える被験者が多いと予測できる。(23b) については、3.1. で説明しているように、人間がどのように使用するかが重要であると考え、対立型と一致型で選ばれる参照物は対照にあるものと思われる。つまり、対立型であればサッカーボールが選択され（図8c）、一致型であれば黄色いボールが選択される（図8d）と想定できる。(23c) については、指示者と向かい合っていることを想定していることから、視点の中心を被験者側にすると考えられる。

5.3. 結果と考察

参照枠を基準に結果を表にまとめたものが、次の表1である。相対的参照枠と内在的参照枠のどちらをとったかを明確にしている。濃いグレーで網掛けしている部分は、一番多く選択されたものである。相対的参照枠を取るか、内在的参照枠を取るかについては、大差が見られず今回のパイロット調査での一般化は難しいと思われるが、あくまで研究方法の確立に主眼を置いている。

表1：参照枠選別の結果

指示基準点	相対的参照枠	内在的参照枠	計
犬	7	8	15
ティンカーベル	6	9	15
ノートパソコン	8	7	15
スリッパ	8	7	15
ペットボトル	15	0	15

この表からわかることは、まず、有生性のある犬や、擬人的事物であるティンカーベルの場合に内在的参照枠が若干増えるということである。言い換えると、人間と機能や姿・形が似ている場合に、被験者の視点は参照物に移動する可能性があると言える。しかし、今回の調査では大差が見られず、仮説（23a）の妥当性証明には至らないという結果になった。また、犬は本物ではなく絵を使用したことから有生物と呼べるのかという疑問が残る。したがって、人間に姿・形の似ているものとして、擬人的事物と有生物を統一的に考えるべきだと考えられるだろう。

次に何を選択したのかを表したのが以下の表2である。

表2：何を選択したかの結果

指示基準点	バスケットボール	サッカーボール	ゴルフボール	黄色いボール	計
犬	6	1	0	8	15
ティンカーベル	6	0	0	9	15
ノートパソコン	7	4	1	3	15
スリッパ	7	0	1	7	15
ペットボトル	11	0	4	0	15

仮説（23b）については、結果は期待と異なるものであった。図8cを見ると、内在的参照枠としてパソコンを見た場合、左にはサッカーボールがあるというのが想定される回答であったが、表2で網掛けしているように黄色いボールと回答した被験者が3名いた。つまり、パソコンを人間が使用すると考えるというより、パソコンの画面を顔と考えた被験者がいたことになる。この結果は、パソコンは内在的参照枠の解釈が2パターン考えられることを意味している。複雑さを避けるために、対立型と一致型の参照物を別立てする必要がないことを示唆しており、内在性のあるものとして統一すべきだと考える。

表3は、視点がどこに置かれたかに注目した表である。

表3：視点の置き方の結果

指示基準点	指示者 から見て左	被験者 から見て左	指示基準点 から見て左	その他	計
犬	0	6	8	1	15
ティンカーベル	0	6	9	0	15
ノートパソコン	1	7	4	3	15
スリッパ	1	7	7	0	15
ペットボトル	4	11	0	0	15

仮説（23c）については、表3からわかる通り、視点を指示者に置いた「指示者から見て左」を選んだ被験者は全体的に少なく、被験者もしくは指示基準点から見て左を選択した被験者が多いことから妥当であると言えよう。また、(22) で提示した質問文の聞き方に関しては、混乱した被験者が見られなかったことから、問題ないと捉えられる。

6. まとめと本調査に向けて

本稿では、日本語と英語の左右表現には、日本語の方が曖昧さを生じさせるという前提のもとその要因と考えられるものについて先行研究を整理し、日本語空間表現「左」「右」についてのパイロットスタディを実施した。分析結果から考察できることは次の(24)に記す通りであり、今後の調査に期待するものとする。

- (24) a. 内在性がある有生物や擬人的要素のある事物では、内在性参照枠が選好される可能性がある。
 b. 統一して考えられる参照物は統一すべきである。

本稿で記した内容は検証段階にあるが、調査条件の絞り込みや人数に関しては継続的な課題である。今後は被験者を増やして調査することを考えている。ここでは主に日本語に主軸を置いたが、文構造によって参照枠を特定できる英語などの他言語における空間研究の触発が期待され今後の研

究にいくつかの方向性を提供しているのではないか。また、本稿のパイロットスタディでは、対象人数が少ない中、調査を実施したが、今後の研究では今回の調査案をもとに検証を行いさらなる日本語空間表現問題の曖昧さ解明に繋げていきたいと思う。また、その結果および実験方法の良し悪しを報告したいと考えている。

謝辞：

本稿執筆にあたり詳細で有益なご助言をくださった実践女子大学の猪熊作巳先生に心より感謝申し上げます。また、パイロットスタディのためのデータ収集にご協力いただいた実践女子大学の学生、英語話者による文法性判断をしていただいた非常勤先のネイティブ教員の皆様に感謝申し上げます。本稿は、「言語と人間」研究会10月例会での発表内容を発展させたものであり、上記研究会にて、有益な助言をしてくださった皆様に感謝申し上げます。

注

1. 「図」と「地」の定義は研究者によって異なるが本稿では、Levinson (1996) とTalmy (2000) 両者の用法を部分的に採用している。
2. Fillmore (1997 : 61) は、“Deixis is the name given to those formal properties of utterances which are determined by, and which are interpreted by knowing, certain aspects of the communication act in which the utterances in question can play a role.”と述べている。例えば、人称を表すI, you、場所を表すthis, that, here, there、時間を表すnow等がそれに該当する。
3. Fillmore (1997 : 35–36) は、“The choice seems to depend on the way in which human beings position themselves with respect to object.”と述べている。
4. 石黒 (2011) では、人間と生物以外で所有格を使用できる例として次の3つ

が述べられている。① ten minute's breakなどの「時の表現」、② there dollars' worth of candy, a yard's distance, ten kilograms' weight, などの「金額・距離・重さの表現」③ Japan's climateなどの「国名などの表現」

5. 人物が3人横並びになっている図を見せ to / on / at を用いたそれぞれの文の場合に誰を選択するかを聞いた。

参考文献

- Fillmore, Charles J. (1997) *Lectures on Deixis*, CSLI Publications, Stanford, CA.
- Fillmore, Charles J. (1998) “Deixis and Context,” *Context in Language Learning and Language Understandings*, ed by Kristen Malmkjær, and John Williams, 27–41, Cambridge University Press, Cambridge.
- フィルモア、チャールズ J. (2022)『ダイクシス講義』澤田淳（訳）. 開拓社.
- Grundy, Peter (2008) *Doing Pragmatics*, 3rd ed., Hodder Education, London.
- 細馬宏通 (2008)「発語とジェスチャーはいかに話者の空間座標を表現するのか?—日本語における左右概念をめぐる個人内・個人間相互作用—」『ことば・空間・身体』, 篠原和子・片岡邦好 (編) 37–68. ひつじ書房.
- 井上京子 (1998)『もし「右」や「左」がなかったら—言語人類学への招待—』大修館書店.
- 石黒昭博 監修 (2011)『総合英語 Forest』第6版. 桐原書店.
- Levelt, Willem J. M. (1996) “Perspective Taking and Ellipsis in Spatial Descriptions,” *Language and Space*, ed. By Paul Bloom, Mary A. Peterson, Lynn Nadel and Merrill F. Garrett, 77–107, MIT Press, Cambridge, MA.
- Levinson, Stephen C. (1996) “Frames of Reference and Molyneux’s Question: Cross Linguistic Evidence,” *Language and Space*, ed. By Paul Bloom, Mary A. Peterson, Lynn Nadel and Merrill F. Grrett, 109–169, MIT Press, Cambridge, MA.
- Olloqui-Redondo, Javier., Thora Tenbrink and Anouschka Foltz (2019) Effects of animacy and linguistic construction on the interpretation of spatial descriptions in English and Spanish. *Language and Cognition*, 11(2), 256–284.
- 大西泰斗、ポール・マクベイ (2011)『一億人の英文法：すべての日本人に贈る「話すため」の英文法』ナガセ.
- Talmy, Leonard. (2000) *Toward a cognitive semantics: Vol. 1. Concept structuring systems*. MIT Press, Cambridge, MA.
- 田中茂範、松本曜 (1997)「第3章 周辺空間詞における日英語比較」『日英語比較選書

6 空間と移動の表現』, 中右実(編) 92-123. 研究社出版.

綿貫陽、マーク・ピーターセン (2006) 『表現のための実践ロイヤル英文法』 *The royal English grammar for practical expressiveness*. 旺文社.